

# 中村粲

なかむら あきら

展転社

あの戦争は何だったのか？ 侵略か自衛か？ 真珠湾から五十年、ついに出来た東京裁判史観への全面的反論の書。迷走する日本人の、自己確認への出発点！

「日本の冤をそぐためにこれを書いた」と

著者はいう。諸君！連載（五百枚）で驚々の論議を

呼んだ話題作に一千枚を新たに加筆して世に問う、大東亜

戦争の真実と事実。「満洲は中国領土か」「日本人はこんな

に虐殺されてきた」「盧溝橋事件の真犯人は」「東條英機は

侵略主義者か」「十二月八日に新聞は何を書いた」等々、戦

後のタブーに敢然と挑む。マクローの視座からの斬新な歴史

観で大東亜戦争に明快な解釈と評価を下し、偏向史観

を一刀両断にする。大学の教壇で多くの学生を魅了した

著者の講義録が、いま国民の教科書として登場。日本

の言論・教育界へ投じる衝撃の千五百枚。

# 大東亜戦争への道

## 緒言

大東亜戦争とは何だったのか——。侵略戦争史観が世を風靡する中で、真面目なる多くの国民が心のどこかに抱き続けてきたに違ひないこの疑問に対して、本書は一箇の新しい視点と解釈を提供せんとするものである。

戦後の滔々たる自虐史観の風潮の中で、依然として東京裁判判決を盲信し、あの戦争の原因責任ともに日本にありとして、祖国の過誤失点のみを内外に揚言して時を得顔なる学者・言論人が少なくない。彼等の筆になる歴史書・歴史教科書また日本の歴史を出来るだけ醜悪に描くことを以て進歩的なりと自負するかの如くである。

筆者は、戦争には多くの場合、複雑な史的背景と原因ありと信ずるが故に、斯かる一方的な日本断罪史観を認め得ないのである。戦争は多くの些細な累積因の上に発生するものだ。歴史の中には、他日戦争を導くことになる禍根が随所に散在する。それらの一つ一つが戦争と平和への道を分けてきたと云へるだらう。そのやうな戦争と平和の分岐点は何処にあつたのか——この小著はかかる問題を考察しつつ、いはばマクローの見地から大東亜戦争の意味について思索を促すことを意図するものである。本書が類書と異なる点は、日本の善意や誠実な和平努力に対して

も——たとへそれが、砂汀に描ける文字の如く空しく消え去つたとしても——正当に評価せんと努めたことであらう。歴史の再検証による自己確認——畢竟、著者の志はそこにあると云つてよい。かと云つて、大東亜戦争を實際以上に美化するものでないことは、虚心に本書を繙くならば走者もなほ理解し得る筈である。

「南京虐殺三十万」といつた荒唐無稽の夢物語が麗々しく新聞の特大活字になるやうに、今や捏造された戦争犯罪までが日本の罪状に重加算されてゆく。しかもなほ、千万人と云へども祖国の側に立つてペンを振るはんとる歌一片の気骨は地を払ひ、学者も文士も報道人も無節操に筆を曲げ、あまつさへ外国と呼応し謀し合はせてまで祖国誹謗の文を売り、国を売る有様である。

この浅ましい世情を見るに耐へかねて、筆者は茲に敢へて秃筆を執つて小冊を綴り、江湖に贈る次第である。就中、次代日本を担ふ青年学徒に本書が教科書の如く読まれ、正しい歴史観を育成し、以て日本に対する愛と認識との出発点たり得るならば著者の欣幸これに過ぐるものはない。

筆者は限りなく日本を愛する。静謐なる日本のみならず、民族の生命を燃やし尽して美しく戦つた、かつての日の日本と日本人の姿をも同じく尊いと思ふ。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

三井甲之

筆者は、戦ひに敗れた祖国を呪詛誹謗して今に時めく徒輩よりも、祖国を守らんとて悲しい命をつみ重ねて死んで行つたかの日々の多くの日本人同胞と共に在りたいと願ふ。そしてその日本と日本人に被せられた濡れ衣を払ひ、冤をそそぐことこそ、この日本に生を享け、そこに生き、そこに死んでゆく仕合せを得た不束な小子の、国恩に報いるせめてもの道なりと信じてゐる。類書すでに洲砂夏星の多きを数ふるに拘らず、敢へて小冊子を世に問ふ所以である。

用語について一言。歴史的用語を尊重する立場から、「大東亜戦争」「支那事変」等の呼称を用ゐ、「太平洋戦争」「十五年戦争」「日中戦争」等、戦後の造語の使用を避けた。同じ理由で「中国」「中華民國」の他に、歴史的に常

用された「支那」も使つた。これらの使ひ分けは、自然な文勢文脈に従つた他、特に理由はない。

上梓までの経緯を略述しておく。大学での講義案を教材として小冊子にまとめようと執筆に取掛かつたのは、昭和五十七年七月十五日であつた。同年十月に第一冊を刊行してより五十九年十一月に至るまで計四冊を『学生のための大東亜戦争史』第一巻、第四巻として出版した。第五巻執筆には五十九年九月より三年半を費して六十三年三月九日に脱稿、原稿枚数は千四百枚を越えた。余りに龐大な分量のため、第五巻は印刷を断念し、全巻を「学生のため」ではなく、一般向きに書き改めるべく第一巻より稿を新たに書き下しに掛かつたのは、第五巻脱稿の正に翌日からであつた。この書き直し作業が一年近く続いた頃、幸運にも文藝春秋社月刊誌『諸君』に連載される機会に恵まれ、この時に、長年胸裡に暖めてきた題名「大東亜戦争への道」を初めて使つた。平成元年五月号から十月号までの半年間続いたこの連載の反響は頗る大きく、国民の求めるものが何であるかを改めて知つたのであつた。連載の分量だけでは単行本として足りず、連載終了後、更に、約千枚を加筆した。『学生のための大東亜戦争史』を起筆してより通算八年にしてこの一本を得る。また感なきを得ない。

執筆と上梓については実に多くの方々の恩恵を蒙つてゐるが、中でもかねてより小子に単行本執筆の機を得さしむべくお心遣ひ下さつた東京大学教授小堀桂一郎、高千穂商科大学教授名越二荒之助両氏の御厚情に対して衷心より感謝申上げる次第である。蘆溝橋事件関係では支那駐屯歩兵第一聯隊戦友会の方々より貴重な体験談を拝聴することが出来た。殊に同会会報の編集を担当する岡野篤夫氏からは吝しみない御指教や資料提供に与つたことを感謝と共に記させて頂く。特筆すべきは、蘆溝橋、通州両事件に関して当時支那駐屯歩兵旅団司令部に所属して居られた大塚賢三氏より、懇切を極めた多くの御教示を頂戴したことである。氏から提供された資料、記録、訳業——それらは書簡と合せて優に一書たり得る分量だが——は正に第一級の価値を有し、事件当時現地に在つた大塚氏ならではの貴重なものである。氏の中国に関する博識、非凡な記憶力、そして旺盛な研究心の賜物である右資料も、本書が通史であるため、そのごく一部しか活用できなかつたことを残念に思ふ。茲に改めて氏から賜つた

数々の御教示に満腔の謝意を表するものである。

更に、時好に逆らふ小著の出版を申出られた展転社の相澤宏明社長の心意と龐大な原稿を整理された同社の柚原正敬編集長の御苦勞に心から御礼申上げたい。最後に、雑誌に掲載される拙稿について家事の合間に精読批評の煩勞を厭はざりし荆妻の内助に一言し、擱筆する次第である。

平成二年 葉月十六日

中村 粲

序章 歴史問題……………15

第一章 近代日韓関係の始り

- 第一節 排外朝鮮の独善……………22
- 第二節 朝鮮の開国……………27
- 第三節 開化と事大に揺れる朝鮮……………34
- 第四節 独立の気力なき国……………39

第二章 日清戦争

- 第一節 開戦と戦況の推移……………46
- 第二節 清国軍の暴状……………52
- 第三節 下関条約と三国干渉……………61
- 第四節 日清戦争と朝鮮……………65

第三章 日露戦争

- 第一節 三国干渉の高いツケ……………76
- 第二節 米国の太平洋進出と門戸開放政策……………79
- 第三節 露国の南侵と日英同盟……………87
- 第四節 国運賭した日露の死闘……………96
- 第五節 日露戦争と日本人……………105
- 第六節 日露戦争の世界史的意義……………115
- 第七節 韓国併合への道……………119

第四章 日米抗争の始り

- 第一節 満洲に於ける鉄道争覇……………132
- 第二節 排日移民問題の発生と軌跡……………140

第五章 第一次世界大戦と日本

- 第一節 「二十一カ条」問題を見直す……………146
- 第二節 石井・ランシング協定とは……………156

第三節 シベリア出兵への視点……………161  
第四節 惨劇——尼港事件……………167

第六章 米国の報復——ワシントン会議

第一節 ワシントン会議の背景……………174  
第二節 会議の成果……………179

第七章 国際協調の幻想

第一節 排日の軌跡……………186  
第二節 外蒙の赤化……………199  
第三節 「現実の支那」の暴状……………205

第八章 革命支那と共産主義

第一節 混迷支那へ赤い爪牙……………214  
第二節 第一次国共合作……………221  
第三節 中共の陰謀と国共対立……………228

第九章 赤色支那への対応

第一節 南京事件……………236  
第二節 幣原外交の理想と現実……………248  
第三節 田中外交の北伐対応……………255  
第四節 怪文書「田中上奏文」……………261  
第五節 濟南事件……………266  
第六節 不戦条約と自衛権……………285

第十章 満洲事変

第一節 満洲緊迫、柳条溝事件へ……………292  
第二節 四半世紀の累積因……………302  
第三節 事変の経過概要……………309  
第四節 満洲独立運動の虚実……………312  
第五節 事変を生んだ内外因……………316  
第六節 満洲は中国の領土か……………328  
第七節 事変と建国を考へる……………335

## 第十一章 北支をめぐる日華関係

- 第一節 塘沽停戦協定…………… 344
- 第二節 日華関係の好転…………… 349
- 第三節 梅津・何応欽協定…………… 351
- 第四節 「三原則」交渉…………… 354
- 第五節 北支自治運動と冀東・冀察両政権…………… 357

## 第十二章 国共内戦と西安事件

- 第一節 蔣介石の思想と政策…………… 364
- 第二節 コミンテルンの大謀略…………… 368
- 第三節 西安事件…………… 374

## 第十三章 蘆溝橋事件の真相

- 第一節 事件の発生と推移…………… 382
- 第二節 日本軍謀略説の虚構…………… 386
- 第三節 真犯人は誰か…………… 392

- 第四節 不拡大への努力…………… 398
- 第五節 惨！ 通州事件…………… 401

## 第十四章 戦火、上海から南京へ

- 第一節 船津和平工作の挫折…………… 412
- 第二節 第二次上海事変勃発す…………… 418
- 第三節 南京攻略…………… 422

## 第十五章 新「虐殺」考

- 第一節 所謂「南京事件」と東京裁判…………… 430
- 第二節 「大虐殺」への疑問…………… 444
- 第三節 「虐殺神話」を生んだ土壌…………… 448

## 第十六章 対支和平への努力

- 第一節 トラウトマン工作…………… 458
- 第二節 汪精衛——悲劇の愛国者…………… 464

## 第十七章 防共への戦ひ

- 第一節 赤いファシズムの成長……………478
- 第二節 日独防共協定——共産主義への防波堤……………485
- 第三節 破られた不侵略条約……………492
- 第四節 膨れ上るソ連軍国主義……………498
- 第五節 張鼓峰事件——ソ連の対日挑発……………503
- 第六節 ノモンハン事件……………519

## 第十八章 対米関係悪化への我が対策

- 第一節 米の海軍拡張……………524
- 第二節 隔離演説とパネー号事件……………526
- 第三節 門戸開放をめぐる日米の相剋……………531
- 第四節 対日経済制裁と中立法改正……………535
- 第五節 北部仏印へ協定進駐……………539
- 第六節 日蘭会商と米英の圧力……………545
- 第七節 汪政権の承認……………549
- 第八節 三国同盟の選択……………553

## 第十九章 日米交渉

- 第一節 交渉の開始と停頓……………564
- 第二節 南部仏印進駐……………569
- 第三節 日米首脳会谈への努力……………575

## 第二十章 日本の和平努力空し

- 第一節 東條内閣の和平努力……………592
- 第二節 参戦を焦る米首脳……………597
- 第三節 我国、重大譲歩を示す……………599
- 第四節 ハル・ノート……………607
- 第五節 真珠湾は奇襲なのか……………617
- 第六節 開戦で安堵した人々……………631
- 第七節 十二月八日と日本人……………635

## 終章 改めて大東亜戦争を思ふ……………653